

目的 わが国の家族は戦後、一般的趨勢として、家制度的家族から夫婦家族へ、拡大家族から核家族へと変化してきた。配偶者選択もその変化に対応し、あるいはその一環として他者選択（見合）から自己選択（恋愛）へ、家柄などの家族的背景の重視から個人的愛情の重視へと変化してきたと一般的に考えられている。しかし、上記の諸変化は必ずしも、その変化間において一貫した整合性があるようには考えられない。自己選択でありながら伝統的な家意識をもっている者、愛情重視の結婚をしながら親との三世代同居を望む者などが少なくないことを見聞きするからである。これは、わが国家族が全体としては、欧米家族をモデルとする近代化を進めながら、わが国独自の特性を示していることの証左なのではなかろうか。そうした点を配偶者選択という視点から検証を試みたのが、本研究である。

方法 調査票による留置き調査で、対象は愛知、岐阜、三重、静岡の東海四県の地域の者。独身者と既婚者に分けた調査を行った。独身者は男女の大学生、男女の高卒者の計355人、既婚者は夫婦を1組とし、計440人。調査期間は、昭和62年11月25日～12月22日。

結果 配偶者選択においては、自己選択や愛情重視の選択をする者の割合は高く、その点では近代化が進んでいる。しかし、一方、結婚式のプロセスでは仲人や結納など伝統的方式が多く残っており、また祖先の墓や家屋の維持などの家意識、夫婦よりは家族を重視するライフスタイル、親との同居などの意識については旧い考え方も残っている。すなわち現代の家族には、近代家族的な意識行動と旧い家族的なそれとが混在していることが明らかになった。